ララ救援
公認団体の活動

ララに参加した「個々の団体」の活動を詳しく記録した資料は少ない。ララ救援公認団体が管理する歴史資料保管所のすべてにあたってみたが、米国フレンド奉仕団をのぞいて、ララに関する資料が発見されたのは、二、三の団体に過ぎない。ララ資料に関するかぎり、米国フレンド奉仕団は「別格」であった。そこには、当時、ニューヨークにあったララ本部の資料も豊富にあった。不思議なことに、ララ救援物資収集・輸送の約半分を扱ったとされる教会世界奉仕団からは、ララに関する資料がほとんど何も発見されなかった。

この章では、ララ参加団体の活動のようす、救援物資の出荷量、その種目の内訳などを各団体から入手した歴史資料をもとに検証する。

1 教会世界奉仕団と米国フレンド奉仕団のララ救援活動実績

ララ救援公認団体の多くは、それぞれ、全国的な信者、会員や支持者のネットワークをもっていた。そして、救援活動のおもな作業である物資の収集や募金は、これらのネットワークをとおして行われた。したがって、全米各地に強力なネットワークを有する団体が募金や救援物資の収集に有利になったのは当然であった。そのいい例が「教会世界奉仕団」(Church World Service) と米国フレンド奉仕団だといえよう。

教会世界奉仕団はララが発足した時点では、まだ存在していなかったが、その後まもない昭和21年 (1946年) 5月4日に、「教会連邦協議会」(Federal Council of Churches)、「海外伝道協会」(Foreign Missions Conference) と「世界教会協議会・米国委員会」(American Committee of the World Council of Churches) の世界的な救済活動を行っていた3団体が設立した新組織であった。これらの3団体の傘下には、数多くのキリスト教会グループが含まれていた。

第Ⅰ章で紹介した「アジア救済教会委員会」(Church Committee for Relief in Asia) もそのひとつであったが、教会世界奉仕団が結成されると、新しい組織に吸収されるような形で、団体の名称は消えたが、メンバー教会の救済活動は続いた。たとえば、記録によると、設立当初は、「兄弟教会」(Church of the Brethren) が一番多くの救援物資を教会世界奉仕団のために集めたことになっている。昭和21年 (1946年) に、兄弟教会がこの新しいグループに供出した物資は88万4000ポンドで、2位の「メソジスト教会」(Methodist Church) の55万7000ポンドを大きく引き離している。なお、3位は「長老教会」(Presbyter-

ian Church）で38万8000ポンド、４位は「多種宗派混合団」（Inter-denominational Groups）で35万4000ポンド、そして、５位は、「米国北部浸礼教会」（Northern Baptist Church）の28万4000ポンドであった。

昭和21年に教会世界奉仕団が扱った救援物資（衣類、医薬品、食糧、書物など）は、合計1000万ポンド以上、金額にすると480万ドル相当であったといわれている。

同奉仕団が設立されたのは、その年の５月であったから、わずか８カ月たらずの間に、このよう莫大な物資の収集に成功したのである。これは献金額なので適当な比較かどうかわからないが、教会世界奉仕団の「前身」の一団体であった「アジア救済教会委員会」は、約２年間におよそ160万ドルを集めたと記録に残っている。教会奉仕団の救援物資収集能力がいかに絶大であったか想像できる。ただし、同奉仕団の集めた物資のすべてが、ララ救援物資として、日本に輸送されたのではない。

さて、教会世界奉仕団の特徴について、もうひとつ言うと、この団体は、さまざまな宗派のキリスト教教会の海外における（とくに、第２次世界大戦を経験した国ぐにの）救済や再建設を調整・統一することを第一目的として設立された組織であったから、宗教団体ではなくて、奉仕団体であった。伝道活動にはまったく関与しなかった、とはいっても、スタッフとしてこの奉仕団の活動に参加した人たちのほとんどは献身的なクリスチャンであったし、それまで別々に活躍していた有力な多数の正統派とプロテスタント教会グループを傘下に収めたのだから、教会世界奉仕団の勢力はララに関してはすさまじいものであった。

厚生省は、ララ救援物資の約半分はこの奉仕団が扱ったものであると、同省がララが終わってまもなく発行した『ララ記念誌』のなかで

述べている。

また、ララ代表ローズ女史が昭和22年（1947年）に作成した資料にも、「これまでの救援物資の約95％は、米国フレンド奉仕団、教会世界奉仕団、カトリック戦時救済奉仕団の３団体からきた」と書かれている（資料Ⅳ－１）。ちなみに、ララ代表の一員として日本に派遣されたマキロップ神父はカトリック戦時救済奉仕団を代表していた。もう一人のララ代表エスタ・ローズ女史は米国フレンド奉仕団に属していた。そして、ララがはじまって、かなりたってから占領軍から許可されてララ代表になったバット博士は、その当時は、教会世界奉仕団所属になっていた。

ララ組織が結成されたのは、昭和21年（1946年）４月であったが、それより前から日本救済活動開始のチャンスをねらっていたのが、米国フレンド奉仕団であった。

昭和20年（1945年）12月12日付の「オフィス内伝達メモ」（注１）は、中国にいる同団体の職員たちに、どうしたらフレンド奉仕団の代表を日本に送り込めるか、調べるように命令したと報じている。米国フレンド奉仕団としては、中国から代表を送るほうがアメリカから送るよりも簡単で、費用も少なくてすむと考えていたようである。このメモを書いたエリック・ジョンソン（Eric W.Johnson）は、当時、米国フレンド奉仕団内で、日本救済活動のプランを作成する責任を任されていたようである。

ところで、別の資料から判明したことだが、「外国部」（Foreign Service Section）の日本関係の昭和21年（1946年）度の予算は、当時の金額で10万ドルであったが（注２）、それが、翌年の昭和22年（1947年）には54万ドル余に増えた（注３）ということは、いかに同団体が日本救済活動、すなわち、ララに力を入れていたかがわかる。

さて、エリック・ジョンソンであるが、最初のメモを発行してから

１カ月もたたない昭和21年（1946年）１月に、彼は日本プランをつくる責任を解かれてしまうのである。解任の理由がなんであったかは、手元の資料ではわからないが、同年１月15日付のエリック・ジョンソンからジェー・パスモア・エルキントン（J. Passmore Elkinton）あての短い手紙のなかに、のちにララ代表として日本へ派遣されたエスタ・ローズ女史（Miss Esther B. Rhoads）の名前がはやくも出てくる。ジョンソンはその手紙で自分が日本プラン作成の任から解かれたことを述べたのち、日本関係の事柄に関しては、ウィリアム・ハンティングトン（William Huntington）に連絡するようにすすめている。「ハンティングトンはローズ女史と協力して、必要事項はうまくやるから」とジョンソンは１月15日付の手紙で書いているのだが、「現時点において、だれが最終的に日本救済の責任をもつことになるかわからない」とも書いている（注４）。

ローズ女史のことであるが、ジョンソンの手紙を最初として、彼女の名前は、ララ救済活動に関する歴史資料のなかに頻繁に出てくるのである。ローズ女史は、ララのことに関してだけでなく、そのほかの面でも、日本国民が戦前・戦後をとおして、「一番お世話になった外国人の一人」だといってもよいだろう。事実、彼女は、「人生のほとんどを終始一貫、日本のために捧げた稀な親日アメリカ人」であった。ローズ女史については、偉大な人生を語った著書が多くあるので、ここではふれないが、ただ、「エリザベス・ヴァイニング夫人（Elizabeth Gray Vining）のあとをついで、当時、皇太子（現在の天皇陛下）の英語の家庭教師になった人」でもあると、つけ加えたい。皇室の英語の家庭教師としては、最初のヴァイニング夫人のイメージがあまりに強烈であったので、ローズ女史のことが忘れがちになるのは残念である。

さて、話をもとに戻すが、ララ救援公認団体のなかには、教会世界奉仕団や米国フレンド奉仕団のほかにも、一日でも早く日本へ「復帰」

(return) をしたいと考えていた団体があったはずである。別の資料からわかったことだが、救世軍、YMCA、YWCA、ガール・スカウトなどの団体は戦前から日本で活動していたこともあって、終戦直後から日本へ復帰するための準備を熱心に進めていたようである。しかし、それとララの関係を示す資料は、いまのところ発見されていない。

2 ララ救援物資出荷・積載量

さきに述べたように、米国のララ本部は、昭和21年（1946年）11月から昭和27年（1952年）6月までの約5年半の間に、合計458隻の輸送船を日本に送った。なんと、1カ月に約7隻の船が救援物資を積んでアメリカのどこかの港から日本へむけて出帆していた勘定になる。救援物資のなかには、中南米諸国の邦人グループが集めたものやカナダやハワイなどに居住する日系人・邦人から寄せられたものが含まれていた。

さて、米国フレンド奉仕団の歴史資料保管所にはララ救援物資出荷・積載について、かなり詳しい資料がある。これらの資料には、ララ輸送船の名称、渡航回数、物資の品種、出荷重量、価格、そして、寄贈団体を記載したものや明らかに日本側が作成したと思われる「救援物資入港数量」に関する記録などが入っていた。

ララ救援物資出荷・積載についての分析をする際、気がかりなのは、同じような資料が少なくとも3種類発見されて、「数字」がいずれも違うということである。まず、厚生省が発行した『ララ記念誌』では、ララ救援物資の受け入れ総計重量は、3347万7122ポンドだと示されている。一方、ララ救援物資入港手続きを担当した日本側の職員が作成

したと思われる「数表」には合計3113万7255ポンドとなっている。これには、元横須賀海軍部需要倉庫にあった、たぶん払い下げになった28万1090ポンド相当の物資も入っていた。さらに、昭和27年(1952年)秋に、エスタ・ローズ女史が「日本キリスト教季刊誌」(The Japan Christian Quartely) に寄せた論文では、3337万8959.50ポンド (計算にミスが発見されたので、正確には3230万1081.50ポンドである)が日本難民救済のために送られた物資の総量になっている(注5)。あとで判明したことだが、ローズ女史が使った数字は昭和21年 (1946年) 9月1日から昭和27年 (1952年) 3月31日までの総計であった。これはたぶん、米国フレンド奉仕団のスタッフが提供した数字であろうが、ララは昭和27年 (1952年) 6月まで続いたのだから、欠けている3カ月をたすと、上記の厚生省の数字と同じくらいになるかもしれない。いったい、どの数字が正確なものかわからないが、厚生省が発表した数字と現場の職員の記録との差が200万ポンド以上もあることが気になる。

これらの資料をよく検討した結果、どの資料も、ほかにない「特徴」

表Ⅳ－A：ララ輸送船数および救援物資量

年号	ララ輸送船数	救援物資量 (ポンド)
昭和21年 (1946年)	1	908,483
昭和22年 (1947年)	41	5,880,110
昭和23年 (1948年)	76	8,087,000
昭和24年 (1949年)	116	6,487,084
昭和25年 (1950年)	110	5,681,563
昭和26年 (1951年)	80	4,657,834
昭和27年 (1952年)	34	1,775,048
合計	458隻	33,477,122ポンド

があるので３種類すべての「データ」が利用できることがわかった。まず、『ララ記念誌』のなかにある「ララ救援物資月別受入表」（資料Ⅳ－２）と「救援物資入港数量」のデータをもとにして数表（表Ⅳ－Ａ）を作成してみた。

まず、ララ輸送船の数をみた場合、昭和24年（1949年）が116隻で一番多く、ピークの年であった。しかし、輸送された物資の重量では、昭和23年（1948年）が、わずか76隻のララ輸送船しか送らなかったが、ほかの年を引き離してトップであった。この理由は、同年積載物資の内訳をみれば、すぐわかる。すなわち、この年にララ救援公認団体はほかの年よりかなり多くの「衣類」と、ララが５年半に出荷した「綿」の総量の93.5％にあたる41万5254ポンドを送ったことがその理由である。さらに、輸送船の数にしても、救援物資の数にしても、昭和24年（1949年）以後は徐々に「下り坂」になっていったことがわかる。

総計の約3300万ポンドは膨大な量ではあったが、日本占領軍総司令部（GHQ）がララ発足当時に許可した「１カ月2000トンまでの救援物資の荷揚げを認める」という条件にははるかに満たない数字であった。もし、仮にララ救援公認団体がGHQに許可された重量の物資をララ期間中に毎月輸送していたとすれば、合計３億ポンド（正確には２億9480万ポンド）に近い物資が日本に届いていたことになる。結局、ララは許可された重量の約11.4％の救援物資を輸送したのに過ぎないのだが、歴史を振り返ってみると、「１カ月2000トン」という数量は、当時のララ参加団体の救援物資収集能力・募金機能を考えたとき、非現実的なものであったといえよう。そのころ、連邦政府関係者は、「日本むけの救援物資出荷量は１カ月合計200トンまで」にするという意向をもっていたようだが、さきにふれたように、アクヴァフスの日本委員会のメンバー団体は、これに不満であった。結果的には「月200トン」が無理のない数量であったようだ。

さて、ララ期間中に日本で荷揚げされた約3300万ポンドの救援物資はどのくらいの金額に相当するのであろうか。昭和27年（1952年）6月21日に東京の日比谷公会堂で開かれた厚生省および全国社会福祉協議会連合会主催の「ララ感謝大会」において、当時の厚生省社会局長であった安田巌氏は、同年3月31日までに送られた「ララ救援物資の総量は、1万6700余トン、金額にして、じつに400億円をはるかに超えている次第であります」と報告した（注6）。しかし、この金額の内訳は『ララ記念誌』にものっていないので、詳細はわからない。

アメリカ側の資料では、米国フレンド奉仕団のスタッフが作成したと思われるものがあるが、それによると、ララ発足から昭和27年（1952年）3月31日までに、ララ救援公認団体は合計1093万4783.24ドル（奉仕団のスタッフの計算にミスがあったので、正確には1092万1015.24ドルとなる）に相当する救援物資を日本に送ったことになっている（資料Ⅳ－3）。

1ドルを360円とすると、約39億円であるが、当時の円の実勢からすると、400億円という数字は誤まったものとはいえないと思われる。ちなみに、安田社会局長の報告のなかにあった「1万6700余トン」は「3340万ポンド」に換算ができるので、アメリカ側の数字と合致する。

3 個々のララ救援公認団体の物資出荷量

個々のララ救援公認団体は、どのくらいの救援物資を収集、または購入して出荷したのであろうか。まず、ララ第1船（昭和21年11月7日出航）からララ第3船（昭和22年1月31日出航）までに積載された物資に関するデータ（注7）を分析すると、以下のような事実が判明

した。3船すべての積載量は合計298万5506ポンドで、価格にすると5万7947.7ドルであった。このうち、教会世界奉仕団が扱った物資は109万7725ポンド（31万4949ドル相当）で、全体積載量の50.2％（価格では54.3％）をしめていた。米国フレンド奉仕団は、85万6589ポンド（21万2579.8ドル相当）を出荷し、これは全体の39.2％（価格では36.7％）であった。さらに、カトリック戦時救済奉仕団が輸送した物資は、14万8727ポンド（3万7400.8ドル相当）で全体の6.8％（価格では6.5％）に値した。兄弟奉仕委員会は全体積載量の3.7％（価格では2.4％）を出荷したが、ルーテル教会世界救援団はララ第3船が出航した時点では、わずか804ポンド（価格では794ドル相当）の古着を送ったのみにとどまった。

つぎに、ララ第23船（昭和22年9月27日出航）から第40船（昭和22年12月26日出航）までに出荷されたララ救援物資についての資料を分析してまとめてみた(注8)。まず、この期間に日本に輸送された物資の量は128万6118ポンドで、価格にすると51万7965.78ドルであった。このうち教会世界奉仕団が全体積載量の46.0％にあたる59万1320ポンド（価格では28万813.82ドル）を扱った。つぎに、カトリック戦時救済奉仕団が31万8112ポンド（価格では5万8674.2ドル）の物資を送ったが、これは全体の24.7％であった。米国フレンド奉仕団が出荷した救援物資は29万3942ポンド(価格では15万4505.96ドル)で、全体の22.9％をしめた。メノナイト中央委員会は6万244ポンド(価格では2700ドル)の物資をララ輸送船に積んだが、これは全体の4.7％であった。最後にルーテル教会世界救援団も2万2500ポンド（価格では2万1272ドル）の物資をララのために収集したが、これは全体の1.7％であった。さて、上記の二つの期間中の救援物資出荷量の団体別の割合（パーセンテージにして）を「表」にまとめると、「表Ⅳ－B」のとおりである。

この表でわかるように、救援物資出荷量において、教会世界奉仕団

表Ⅳ－B：団体別救援物資出荷量割合

団体名	ララ第1船から3船まで	ララ第23船から40船まで
教会世界奉仕団	50.2%	46.0%
米国フレンド奉仕団	39.2%	22.9%
カトリック戦時救済奉仕団	6.8%	24.7%
兄弟奉仕委員会	3.7%	－
ルーテル教会世界救援団	0.1%以下	1.7%
メノナイト中央委員会	－	4.7%
合計	99.9%余	100.0%

がほかの救援団体を大きく引き離してリードしている。分析した両方の期間中に日本に出荷されたララ救援物資の約半分はこの団体が収集したものであった。つづいて、米国フレンド奉仕団が、ララ第1船から第3船までは全体積載量の約5分の2を扱ったが、のちのララ第23船から第40船までの期間では、出荷量が全体の約4分の1以下に減ってしまった。さらに、カトリック戦時救済奉仕団は、ララ発足当時は、わずかの救援物資しか出荷しなかったようだが、次第にその量も増えたようである。そして、ララ第23船から第40船までの期間には全体出荷量の約4分の1を送ったと記録に残っている。「表Ⅳ－B」にのっている兄弟奉仕委員会、ルーテル教会世界救援団、そしてメノナイト中央委員会は、たしかに救援活動には参加したけれど、いずれも扱った救援物資はわずかしかなかった。最後に、上記の表で紹介された6団体以外のララ救援公認団体は、分析した二つの期間の救援物資出荷に関する資料のなかからは発見することができなかった。しかし、この分析の対象になった輸送船の数は21隻で、これらはララ輸送船全部の458隻のわずか4.6%にしかあたらない。

ほかの時期に救援物資を出荷した団体のなかには上記の6団体以外

の組織が入っているかもしれない。ちょうど、この「謎」を解くために役立つ資料が発見されたので紹介しよう。それは、昭和21年（1946年）9月から昭和23年（1948年）7月までに日本へ輸送された救援物資の送り主と出荷量と価格を示す記録である(資料Ⅳ－4)。注目すべき点は、この記録は、救援物資がアルゼンチン、ブラジル、カナダ、ホノルルからも送られたことを証明していることである。すなわち、上記期間の約2年間（正確には1年と10カ月）に合計1362万4527ポンド（価格にすると380万ドル余）の物資が日本へ送られたが、このうちの57.9％に当たる788万8049ポンド（価格では216万ドル余）は、教会世界奉仕団が収集したものであった。

つぎに、米国フレンド奉仕団が送った物資は250万2000ポンド(価格では77万ドル相当）で、これは全体の18.4％であった。このほか、兄弟奉仕委員会、ルーテル教会世界救援団、メノナイト中央委員会も物資を出荷したが、その量はわずかであった。興味深いのは、アルゼンチンの邦人グループが7万3216ポンド（価格では6万4640ドル相当）の物資を日本へ送ったことになっていることと、ブラジルの日本救済団体がアルゼンチンよりも数倍の重量の救援物資（39万6480ポンド）を輸送したけれど、金額ではアルゼンチンの約半分くらい（3万7007.10ドル相当)の価値にしかならなかったことである。出荷した物資の違いがこのような金額の差になってしまったのである。なお、中南米諸国における邦人・日系人グループの救援活動についてはⅤ章以降で述べる。

さて、上記の期間中（昭和21年11月から昭和23年7月）に出荷された物資の「重量」と「金額」の出荷団体別割合をパーセンテージになおして「表」にすると、次ページの表（表Ⅳ－C）のとおりである。

この分析の対象となった期間でも、教会世界奉仕団がほかの団体を断然リードして、重量でも金額においても全体の約半分以上の物資を

表Ⅳ－C：団体別救援物資出荷量割合*

団体名	物資出荷量（%）	金額（%）
米国フレンド奉仕団	18.4	20.1
アルゼンチン	0.5	1.7
ブラジル	2.9	1.0
兄弟奉仕委員会	0.6	0.4
カナダ教会協議会	0.1	0.4
教会世界奉仕団	57.9	56.3
ホノルル・ララ委員会	4.9	6.4
ルーテル教会世界救援団	1.2	1.5
メノナイト中央委員会	0.4	0.1
カトリック戦時救済奉仕団	13.0	12.1
合計	99.9	100.0

*昭和21年（1946年）11月から昭和23年（1948年）７月までの合計

出荷したことがわかった。つづいて米国フレンド奉仕団であるが、この組織は全体の約５分の１相当の救援物資を日本に送った。カトリック戦時救済奉仕団がこの期間に３番目に多くの物資を積載したのだが、その割合は全体の７分の１を少し上回る程度であった。その他、ララ救援公認団体のリストに名前を連ねていた兄弟奉仕委員会、ルーテル教会世界救援団、メノナイト中央委員会もたしかに物資を日本へ送ったが、全体の割合からみると、わずかなものであった。最後に、アルゼンチンやブラジルの邦人や日系人が設立した「日本救済委員会」は相当活発に物資を収集したり、募金を集めていたらしい。しかし、米国連邦政府から認可された団体として輸送できなかったので、米国フレンド奉仕団とか教会世界奉仕団など「ララ救援公認団体」に託して送るしか方法がなかった。中南米諸国で起こった「日本難民救済運

表Ⅳ－D：ララ期間中における各救援団体物資出荷実績*

団体名	物資出荷量（ポンド）	%**	金額（ドル）	%**
米国フレンド奉仕団	7,355,202.5	22.8	2,807,857.79	25.7
カナダ教会協議会	208,133	0.6	200,923.00	1.8
教会世界奉仕団	14,014,159	43.4	4,199,264.30	38.5
ホノルル・ララ委員会	1,411,106	4.4	545,292.82	5.0
ルーテル教会世界救援団	1,801,651	5.6	530,062.77	4.9
カトリック戦時救済奉仕団	7,398,346	22.9	1,957,270.56	17.9
その他の団体	112,484	0.3	680,344.00	6.2
合計	32,301,081.5***	100.0	10,921,015.24****	100.0

*昭和21年（1946年）9月1日から昭和27年（1952年）3月31日までの合計。
**%は筆者が計算したものである。
***原文では合計重量が33,378,959.5ポンドであったが、これは計算ミスである。
****原文では金額が10,934,783.24であったが、これは計算ミスである。

動」についてはあとでふれることにする。

さて、5年間余にわたるララ全期間におけるララ救援公認団体、個々の救援物資出荷実績はどんなものであったろうか。ローズ女史が「日本キリスト教季刊誌」に発表した論文には、ララ発足から昭和27年（1952年）3月31日までのさまざまな団体の救援物資出荷「量」と「金額」に関する「数表」がのっていた。これは、ララに参加した団体の実績を知るうえで、とても重要な歴史資料なので、そのまま表（表Ⅳ－D）とした。

これまでに紹介した資料で、すでに示唆されたとおり、やはり、教会奉仕団が「量」においても「金額」においてもララの期間中に最大の物資を出荷したことが明らかである。同奉仕団が扱った物資は、その量では全体の43.4%、金額では全体の38.5%であった。2番目に多

くの量の救援物資を送ったのは、カトリック戦時救済奉仕団（全体の22.9%）であったが、3位の米国フレンド奉仕団（全体の22.8%）との差はわずか4万3000ポンドであった。ところが金額に換算すると、フレンド奉仕団（全体の25.7%）が積載した物資の方がカトリック組織（全体の17.9%）のものより約85万ドルも値打ちがあることがわかった。簡単にいうと、これはフレンド奉仕団のほうが量は同じでもカトリックの団体よりも高価な物資を送ったことに起因する。しかし具体的にどの物資がこれほど大きな差をつける原因になったのか、手元にある資料ではわからない。物資の量では、4番目に多くの物資を送ったのはルーテル教会世界救援団（全体の5.0%）であったが、金額ではホノルル・ララ委員会（全体の5.6%）が4番目であった。ちなみに、ホノルルの団体は物資の量では5番目、ルーテル教会組織は、金額的にはホノルル委員会についで5番目であった。

ここで注目したいのは、表Ⅳ－Dにはララ救援公認団体14団体のうち、わずか4団体しか明記されていないことである。ほかの10団体は「その他の団体」として、全部合わせて物資の量では11万ポンド（全体の0.3%）、金額にすると68万ドル相当（全体の6.2%）の物資をララ期間中に日本に輸送したことになっている。この10団体のなかで、兄弟奉仕委員会、メノナイト中央委員会、YWCAの3団体ついては、さまざまな救援物資をララ輸送船に積載した記録が日本のララ職員が作成した「ララ救援物資入港数量一覧表」（October 1946-June 1952）で証明されている。

さらに、YMCAが昭和23年（1948年）になって、2000ドルあまりの物資の購入を教会世界奉仕団に依頼したという証拠が発見された（注9）。つづいて、救世軍の歴史資料室からは「昭和23年（1948年）11月9日－10日付で、救世軍はララの映画を作成するために200ドルの献金を認めた」という記録が見つかった（注10）。残りの数団体については、

物資の収集とか、輸送に関するかぎり、なんの資料も見つからなかった。しかし、ガール・スカウトに関しては、『ララ記念誌』が「スカウト用品を日本に送った」と認めているが、それ以外のことはわからない。

ところで、表Ⅳ－Dの団体リストのなかには、ララ救援公認団体でないものも含まれていた。たとえば、「ホノルル・ララ委員会」は「日本および朝鮮救済ハワイ委員会」(Hawaii Committee on Relief for Japan and Korea) のことに違いない。あとで説明するが、この団体はララ救援公認団体としての認可を受けていなかったので、とくに最初の3、4年間は、ほかのいずれかの公認団体に託して収集した救援物資を日本へ輸送しなければならなかった。この点では、カナダ教会協議会の場合も同様であったようだ。米国フレンド奉仕団に関する資料のなかには、同奉仕団とハワイやカナダ在住の邦人・日系人の日本難民救済活動との密接な関係を示す資料がいくつかあった。さらに米国フレンド奉仕団は、中南米諸国の邦人・日系人グループとも日本救済について深い関係にあった。

4 ララ救援物資の内訳

ララ救援物資には多種、多様の品物が入っていた。たとえば、さきに物資出荷量の分析をしたララ第1船から第3船までに積み込まれた物資の内訳は、以下のとおりであった。

米粉、乾燥スープ、練り粉、塩、粉全乳、各種缶詰、ビタミン剤、古着、多目的食料、キャンディー、脱脂粉乳、干しジャガイモ、乾燥モモ、石鹸、古靴、砂糖、朝食用穀物、小麦粉、米、医療器具、

乾豆、クリスマス用品、ローソク。

このリストでわかるように、おもな品種は食料、衣類、医薬品、雑貨であった。第4船以後の物資の種類をララ本部で作成した救援物資出荷記録で見ると、上記のリストに入っていないものがたくさんあることがわかった。たとえば、食料では各種干し果物、スパゲッティ、干し肉、植物油、シロップ、バター、マーガリン、チョコレート飲料などである。このほかに、雑貨類では毛布、中古寝具、裁縫道具、台所用品、文房具、子ども玩具、古本、庭園用具、化粧品、布、屑綿などがララ第4船以後の救援物資リストのなかに含まれていた。このほか、「ララ救援物資入港数量一覧表」の最後に、山羊279頭、乳牛45頭が送られたと記されている。これらは、いずれも兄弟奉仕委員会が送ったものである。同委員会は、山羊、乳牛以外にも雄牛25頭をアメリカの「全国子雌牛プロジェクト」(The Heifer Project) から日本へ送ったことが記録に残っている。ここで紹介したララ救援物資の内訳は、アメリカ側の資料をもとにして作成したものであるが、厚生省が発行した『ララ記念誌』に記載されたリストにはもっと多くの種類の物資がのっていた。

いったい、どの団体がどんな救援物資を送ったか、明らかなパターンがあるのか調べてみた。この分析は、ララ第1船から第3船までの物資積載リストをもとに行った。

まず、この期間に物資を出荷したのは次の5団体であった。1)教会世界奉仕団、2)米国フレンド奉仕団、3)兄弟奉仕委員会、4)カトリック戦時救済奉仕団、5)ルーテル教会世界救援団。この5救済団体全部でさきに上げた23種類の物資を寄せたが、もっとも多くの量の物資を送った教会世界奉仕団が、物資の種類でも、もっとも多種類の物資(合計17種類) を出荷した。ちなみに、同奉仕団がこの期間に送らなかった品物は、つぎの6品目だけであった。①多目的食糧、②キャンディ

ー、③砂糖、④小麦粉、⑤米、⑥医療器具。

つぎに、米国フレンド奉仕団は合計10種類の物資を積載したが、その内訳は以下のとおりであった。①米粉、②粉全乳、③古着、④多目的食糧、⑤キャンディー、⑥脱脂粉乳、⑦乾燥モモ、⑧石鹸、⑨砂糖、⑩朝食用穀物。

さらに、カトリック戦時救済奉仕団は、以下の７種類を寄せた。①粉全乳、②古着、③石鹸、④多目的食糧、⑤小麦粉、⑥米、⑦医療器具。つづいて兄弟奉仕委員会は粉全乳、多目的食糧、そして脱脂粉乳の３種類を出荷したが、ルーテル教会世界救援団は古着だけだった。

この分析で判明したことは、ララ発足当時に関するかぎり、粉全乳と古着がもっともポピュラーな救援物資であったことである。４団体がそれぞれ粉全乳と古着の２種類の物資を送った。続いて脱脂粉乳と石鹸がポピュラーな品物であった。３団体がこの２種類の物資を出荷した。予想外だったのは、小麦粉、米がたった１団体（カトリック戦時救済奉仕団）からのみ送られたことであった。

では、ララ期間中にどんな物資がどのくらいの量、日本に送られてきたのであろうか。ララ救援物資出荷積載量に関する資料は少なくとも３種類発見されたが、「数字」がいずれも違っていた。さらに指摘したように、アメリカ側が作成した資料には「計算ミス」もあった。したがって、ここでは、もっとも正確度が高いと思われる『ララ記念誌』にのっている数字をもとに分析をすすめることにした。日本側の資料では、合計3347万7122ポンドのララ救援物資が送られてきたことになっている。その物資の内訳は、つぎの表Ⅳ－Ｅのとおりである。

この表で明らかなように、その重量を比べると、ララ物資のなかでもっとも多くの割合をしめたのは、食糧品（全体の75.3％）であった。２番目は衣料品（全体の17.5％）、そして３番目は靴（全体の2.0％）であった。この３種類の物資の割合が全体の94.8％にもなるので、重

表Ⅳ－Ｅ：ララ救援物資受領総量と内訳

種類内訳	重量（ポンド）	%
食　糧	25,220,149	75.3
衣　料	5,863,400	17.5
医薬品	170,367	0.5
靴	662,289	2.0
石　鹸	321,955	1.0
原　反	301,830	0.9
綿	444,276	1.3
その他	492,856	1.5
総　計	33,477,122	100.0

量に関するかぎり、残りの物資の割合はわずかであった。

米国フレンド奉仕団の歴史資料保管所から発見された「作者不明」の資料（注11）は、昭和21年（1946年）11月から昭和27年（1952年）6月までのララ救援物資輸送量は、合計3340万8893ポンドであるとしている。その重量の内訳は、食糧品が全体の75.4％で1位、衣料が17.5％で2位、そして靴が2.0％で3位であるから、厚生省の記録とほとんど同じである。

5 この章のまとめ

ララ救援公認団体は全部で14団体であったが、結果的にみると、全米各地に強力なネットワークを有する団体がほかの団体に比べてより多くの救援物資を収集・出荷した。昭和21年（1946年）11月から昭和

27年（1952年）6月までに、ララ救援団体は、合計458隻のララ輸送船を日本（その後、沖縄、朝鮮へむかった船舶もあったようだが）へ送り、総量3300万余ポンドの多種、多様の物資を積載した。これははじめ、連邦政府が許可した日本への救援物資の量をはるかに下回るものであったが、価格にすると、当時の額で約1100万ドルであった。

もっとも多くの物資を寄せたのは教会世界奉仕団であった。この団体は海外の救済・建設活動を目的として設立された奉仕組織でララ救援物資の43.4％（価格では全体の38.5％）を扱った。カトリック戦時救済奉仕団が22.9％(価格では全体の17.9％)、米国フレンド奉仕団が22.8％（価格では全体の25.7％）の物資を出荷した。この3団体で重量では全体の89.1％相当（価格では全体の82.1％）の物資を寄せたことになる。この3団体以外にルーテル教会世界救援団、兄弟奉仕委員会、メノナイト中央委員会が、救援物資をララ輸送船に積載したと記録に残っている。ララ公認団体のほかに、各地の邦人・日系人グループの日本難民救済活動は活発であった。これについてはV章以降で検討する。

ララ救援物資は多種・多様であった。しかし、食糧が全体量の75.3％をしめていた。そして、衣料が17.5％であった。この2種類で、全体の92.8％になるのだから、ほかの品物のしめる割合はわずかであった。しかし、ララ物資には食糧や衣料のほかに、靴（全体の2.0％）、綿（全体の1.3％）、石鹸（全体の1.0％）、原反（全体の0.9％）、そして医薬品（全体の0.5％）など、当時の日本人の生活にとって、重要な品物が含まれていたことを忘れてはならない。

注1——米国フレンド奉仕団が作成・配分した報告書「日本における救援ニーズおよびクエーカーが進出できる見込み」に付けた昭和20年（1945年）12月12日付のカバーレター(添え手紙)／米国フレンド奉仕団歴史資料保管

所（Archives）所有

注２――米国フレンド奉仕団日本部の昭和21年（1946年）１月１日から同年９月30日までの「収入・支出報告書」／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注３――米国フレンド奉仕団日本部の昭和21年（1946年）９月１日から昭和22年（1947年）６月30日までの「収入・支出報告書」／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注４――米国フレンド奉仕団エリック・ジョンソン（Eric W. Johnson）からジェー・パスモア・エルキントン（J. Passmore Elkinton）にあてた昭和21年（1946年）１月15日付の手紙／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注５――ララ代表ローズ女史が「The Japan Christian Quarterly」の昭和27年（1952年）秋季号に発表した論文「ララ」／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注６――昭和27年（1952年）６月21日東京で開かれた「ララ感謝大会」における安田厚生省社会局長の「ララの経過についての報告」／昭和27年（1952年）厚生省発行『ララ記念誌』より引用

注７――ララ第１船からララ第３船までの物資積載量・種目・価格・送り主および出航日、船舶名／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注８――昭和22年（1947年）９月１日から同年12月31日までのララ物資積載量・種目・価格・送り主および出航日、船舶名／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注９――教会世界奉仕団アジア地区責任者エー・ヘンリー・ブァケル（A. Henry Birkel）からYMCA国際委員会のローレンス・トッドネム（Lawrence Todnem）にあてた昭和23年（1948年）３月10日付の手紙／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

注10――救世軍歴史資料保管・調査センター責任者カーニー・ハグード（Connie Hagood）から著者にあてた平成８年（1996年）７月12日付の手紙／多々良紀夫所有

注11――ララ救援物資出荷報告書－昭和21年（1946年）11月から昭和27年（1952年）６月まで／米国フレンド奉仕団歴史資料保管所（Archives）所有

「多々良紀夫氏著：LARA～救援物資は太平洋を超えて」より